

日独比較研究からみた地域住民のスポーツクラブ 継続参加理由の差違

The reason of continuous participation of community dwelling elderly for sports club by comparative study

健康スポーツ学科 神 野 宏 司

KOHNO Hiroshi

健康スポーツ学科 鈴 木 智 子

SUZUKI Tomoko

生活支援学科 嶋 崎 博 嗣

SHIMAZAKI Hirotsugu

健康スポーツ学科 松 尾 順 一

MATSUO Junichi

要旨

本研究プロジェクトは総合型スポーツクラブがどのように仲間づくりを促しているか、住民がスポーツクラブに継続参加する理由をインタビューおよびアンケート調査の双方から検討することを目的とした。インタビューの結果、ドイツでは運動、スポーツは対人交流、社交の重要な機会であり、スポーツクラブや指導者もそれを推進するしぐみに配慮している姿勢が伺われた。アンケート調査の結果、ドイツは病気予防のためよりも参加する運動プログラム自体への評価が高く、身体を動かすことが楽しいから参加しているという回答が日本人と比べて7.33倍高い結果が示された。また、参加者同士の交流を継続理由としてあげる回答が日本人の7.82倍、運動後の食事・会話が楽しいからという回答も6.67倍と日本人と比べて対人交流がより強い継続参加理由となっていることが明らかとなった。

キーワード：総合型スポーツクラブ 中・高齢者 仲間づくり

I. 背景と目的

生活習慣病の予防、健康寿命の延伸に運動、身体活動の果たす役割の重要性が認識されるようになり、2013年に発表された健康日本21（第2次）においても身体活動量をどのようにして増加させるかが重要なテーマとして取り上げられている。その健康日本21において健康的な習慣を促す生活環境の整備が新たな方策として提示され、誰でもが身近に運動、身体活動を行える環境の整備が行政に求められている。このような環境の整備が早くから進められ、総合型スポーツクラブとして地域に根ざした運動環境を持つ国がドイツといえる。今日、日本では総合型地域スポーツクラブの全国展開が急務とされながら、実質的には進んでいないのが現状である。総合型地域スポーツクラブのモデルはドイツにあり、ドイツの総合型地域スポーツクラブで最大規模を誇るTurn-und Sportverein Bayer 04 Leverkusen (TSV) は、広く一般の人々の健康づくりを100年以上支援している。鈴木ら¹⁾は100年あまりの伝統を持つ総合型スポーツクラブであるTSVが幼児、その保護者から高齢者に至る幅広い参加者を対象にプログラムだけでなくどのように運営しているかを調査してきた。その過程から参加者にとって総合型スポーツクラブが身体的な健康、精神的な健康を維持する場であるとともに仲間づくりの場としても大きな役割を果たしていることが伺われた。近年、運動、身体活動の習慣化に家族や仲間の存在が重要であることが多く報告されており、運動の習慣化に仲間づくりをどのように進めるかは重要なテーマと考えられる²⁾。このドイツにおける総合型スポーツクラブの活動を検証することにより、スポーツクラブが住民の仲間づくりに果たしている役割を明らかにすることは意義のある研究と考えられる。そこで本研究プロジェクトは総合型スポーツクラブがどのように仲間づくりを促しているか、住民がスポーツクラブに継続参加する理由は何かをインタビューおよびアンケート調査の双方から検討することを目的とした。

II. 方法

調査対象はSCBayer05とした。このクラブは1905年に開設され、現在6200名の会員を有し、そのうち850名がシニアクラスの参加者である。クラブには調査の目的、質問内容を伝えた上で運営スタッフへのインタビューを依頼した。また、クラブ運営者を通じてシニアクラス参加者にアンケート調査およびインタビューを依頼し、インタビューにあたっては個人的な内容を尋ねないことを了解の上で回答を得られた。

1. インタビュー

インタビューはクラブのシニアクラス・マネージャー、現場責任者、担当者の3人に対して実施した。質問内容はクラブのプログラム実施頻度、参加者数などの全体像およびクラブが参加者間の交流、仲間作りを図るためのしくみを設けているか、その内容とした。また、シニアクラスの参加者にアンケートへの回答と同時に参加年数、目的や参加者間の交流についてインタビューを実施した。

2. アンケート調査

アンケートは参加歴、参加頻度、参加メンバー間の交流状況、仲間づくり形成がスポーツクラブへの参加継続に影響するのかを尋ねる質問紙を作成し、ドイツに長期間在住する日本人によるドイツ語への翻訳およびドイツ人の習慣に合わせた修正を繰り返して作成した調査用紙を用いた。シニアプログラム参加者にプログラム終了後回答を得るとともに一部留め置き法による回答を得た。SC Bayer05 シニアクラス参加者60歳以上74名、および日本人にはスポーツクラブに現在参加して一年以上となる60歳以上の地域在宅高齢者を調査対象としたインターネット調査を実施し、男性50名、女性50名から回答を得た。回答は4択形式とし、オッズ比の算出のために上下で2区分に分割した。オッズ比は日本を1とし、数字が大きい項目はドイツのクラブ参加者がより強く考えているということを表している。オッズ比の算出にはIBM社、SPSSver22を用いた。

3. 倫理上の配慮

参加者にはクラブからインタビューの依頼、同意の上で年齢等の個人情報に関することは質問しないこと説明し、同意を得た上で回答を得た。

Ⅲ. 結果および考察

インタビューおよびアンケート結果を表1、表2に示した。インタビューの結果、ドイツでは運動、スポーツは対人交流、社交の重要な機会であり、スポーツクラブや指導者もそれを推進するしく

表1 インタビュー結果の要約

• クラブ運営者	
□ 月一回会員間の交流を促す軽食パーティを実施	
□ 年数回クラブ運営者と会員間の意見交換会の実施	
□ 体力等のデータを取ることにあまり関心を持っていない、参加者からも希望はない	
• 指導者	
□ 新規参加者と従来からの参加者との交流を促す働きかけ（声がけ、紹介、グループ実施型のプログラム）	
• 参加者	
□ 教育システムを背景に「運動はクラブですもの」という価値観に基づく運動実施・継続	
□ 参加者は「皆、古くからの顔なじみ、友人たち」という安心感が共有されている	
□ スポーツ後に誘い合って食堂に寄り軽食を取りながらする、おしゃべりを楽しみで参加している。	

表2 日本とドイツのスポーツクラブ参加目的

	ドイツ		日本		オッズ比
	はい	いいえ	はい	いいえ	
体調維持のため	64	10	80	20	1.6
病気の予防のため	40	34	85	15	0.21
友人との交流	64	10	45	55	7.82
運動すると気持ちがよい	66	6	60	40	7.33
運動が楽しい	60	14	52	48	3.96
運動後の食事・会話が楽しい	40	34	15	85	6.67

オッズ比の値は日本を基準1とする

(人)

みに配慮している姿勢が伺われた。アンケートの結果を見ると体調維持への関心は日独ともに高いが、ドイツの方がやや強い傾向（オッズ比1, 6）が見られた。対して日本人は病気予防が強い参加動機となっている（オッズ比0.21）事に比べてドイツは病気予防のためよりも参加する運動プログラム自体への評価が高く、身体を動かすことが楽しいから参加しているという回答が多く寄せられた。このインタビュー結果、アンケートの結果の両方から支持され、日本人の参加動機と比べて7.33倍高い結果が示された。また、参加者同士の交流が継続参加理由として強く日本人の7.82倍、運動後の食事・会話が楽しいからという回答も6.67倍と対人交流に積極的と考えられる参加動機となっている様子がうかがわれた。インタビューに示されているようにドイツは「運動は学校ではなく、スポーツクラブですもの」、「スポーツクラブには長年の友人が集い楽しく交流する場」と日本とは異なる価値観が伺えた。体力測定など自身の身体機能を客観的に評価するのは病院で行うことであり、スポーツクラブの目的ではないという考え方が日本とは異なることも伺えた。近年、スポーツを通じた町づくりや地域の活性化に総合型スポーツクラブを位置づける試みがなされている。いずれも対人交流を促し住民間のソーシャルサポートを強化するものであるが、ドイツのように幼少期からスポーツを通じたコミュニティが形成されていない日本ではドイツとは異なる対策が必要と思われる。

IV. 結論

日本およびドイツの地域住民がスポーツクラブに継続して参加する理由をインタビューおよびアンケート調査から検討した結果、以下のことが明らかとなった。

- 1) 体調維持への関心は日独ともに高いが、ドイツの方がやや強い傾向が見られる。
- 2) 日本は病気予防が強い参加理由となっている。
- 3) ドイツでは日本と比較して、身体を動かすこと自体が楽しいから参加している、また、参加者同士の交流が強い参加理由となっていることが明らかとなった。

謝辞

本研究を進めるに当たって調査にご協力頂いた参加者の方々、調査の機会、会場を設定して頂いたSCバイヤー05の各位に感謝申し上げます。

文献

- 1) 鈴木智子, 神野宏司, 嶋崎博嗣, 松尾順一: ドイツのスポーツクラブに関する調査研究 ―子ども及び高齢者を対象としたプログラム及び指導法を中心に― ライフデザイン学研究, 10, (2015) pp.317-306.
- 2) 渡邊 剛: スポーツで深まる地域の絆〜地域活性化の処方箋としての「総合型地域スポーツクラブ」: 共立総合研究所, (2012)